

慈照寺銀閣は足利義政公の別荘なり。「浄土寺村にあり」東求堂の中央は相阿弥の筆の花鳥なり、数寄屋四畳半、

其中の違棚の張付梅の画は古法眼の筆、帳台の腰障子琴棋书画の図は狩野永納、両腋の蘭水仙は相阿弥の筆なり。東間

には義政公薙髪の木像を安ず、延徳二年正月七日に薨じ給ひて慈照院殿准三宮喜山大居士と称ず。「台齡五十六」此

間の竹に若松は相阿弥図し、方丈の中の間は海北友雪の仙人尽し、東の間は逍遙軒の山水なり、西の間も山水にして狩

野隆也の筆、襖は土佐光興、屏風は相阿弥の筆、芦と薄に金銀の砂子を濃ちらして希代の名筆なり。

集芳軒「堂後にあり、近世の造立なり、維明和尚の梅、呉月溪の画見えたり」

茶水井「東求堂の北にあり、沸泉の流れ東求堂へ通ふ」

○足利將軍義政公は永享八年正月二日に誕生、宝徳元年四月廿九日征夷大將軍に任じ、享徳二年三月に従一位に叙し、

同年十二月源氏長者として淳和井学両院別当に補す。応仁元年山名宗全威を震ひ、管領細川勝元と合戦止事なし。此

時勝元は主上上皇を迎奉り、三種神器を捧て室町花御所に行幸あり。將軍家は勝元を捨て意を宗全に寄て、天子を挟

で日々闘戦す。此騷擾に南禅寺相国寺及寺院多く焦土となる、其外洛中洛外諸侯第民家等兵火に罹ずといふ事なし、

これを応仁乱といふ。此時本朝旧記諸家文書兵燹に焼亡紛失する事数しれず。同六年大明国の勘合の印を求む。応仁

元年より十一年まで諸大名みな其領国を守て割拠の形勢あり。尚山名細川の徒洛中に対陣す。將軍を足利義尚公に譲

り、東山慈照寺に銀閣を建て、古器名画を翫び芳茗を喫して幽棲す、世に東山殿といふ。延徳二年正月七日前征夷大

將軍從一位准三宮源義政公薨みなものよしまさず。〔年齡五十一〕太政大臣を贈る。原当山は將軍家の山閣なれば莊麗にして封境広し。

応仁の乱に荒蕪し、又天正の末近衛このゑ龍山公りようざん豊臣秀吉公と御中不和にして、龍山公は筑紫つくしへさすらへ、三歳を歴て帰洛し給ふ後こゝに姑幽棲し給ふ。其時什宝多く離散しけるとぞ聞えし、今僅に寺宝となる其品目に云。

○東山殿月見御会十首和歌〔左に見ゆ〕

○硯宮〔銘布留野、蒔絵和州布留野社図、東山義政公よしまさの所持〕

○東求堂額〔東山殿真筆〕 ○同仁齋額〔同筆〕
とうぐうだう どうじんさい

○七賢盃〔七盞、有レ銘悉竹林七賢書ス名〕 ○東山殿家集〔拔書〕

○唐物朱塗蒔絵膳椀〔希世の名器なり、今十人前あり、初は五十人前といふ、天正に離散す〕

東山殿月見御会十首和歌

月前煙 雪の色はひかりにきゆるふじのねのけぶりばかりぞ月にたえせぬ

月前鴈 めぐりあふ雲ゐはるかにきにけらしみやこの月のころもかりがね 量 光

月前虫 露ふかき千草の花をやとりとてさやけき月にむしぞ鳴なる 公 兼

月前鹿 月見てぞいとゞねられぬ老が身の夜半の友とや鹿もなく覧 (大納言典侍)

月前鶉 身にしむか野もせの露に月深てなくやうづらのとこの秋風 義 政

月前嶋　　をのづからあはれはをのがねにたて、月に数かくしぎのはねがき　道　　永

月前鶏　　おとこ山月かたぶけば神がきのゆふつげどりや声しきるらん　　季　　経

月前猿　　月見つゝなぐさむ秋をわびしらにましらやなきておどろかすらむ　元　　長

月前鐘　　ながめわびぬ月すむ夜はのかねのこゑふけゆく影の空にしられて（真乗寺宮）

蕭寺月　　月はなを杉の木のまに影見へてめぐる横河のみねのよこ雲　　堯　　胤

義政公御成式目壹卷　相阿弥筆巻物表具茶地錦

米元暉作名は米友仁字は元暉宋朝之人山水を画く

座敷の飾花子細　口伝有之

一夫花を立る事は仏在世より今にいたるまで戒定恵の三字をしめしあらはさるゝと見へたり

一三具足の燭台に対して右長左短古今遠近と可立や開枝は慈悲の枝なり懷枝は智恵の枝也

一右長といふは右へながくひらかせ左へ出さず左をば座敷をいだかする也左短といふは右へなげば左をみじかくかゝゆ

るていなり古今といふは古は一季さりたる花をいひ今とは当季の花をいふ遠といふ事は風情たかく見へたる本木をい

ふ近とは副草の水ぎはにてありくゝとしたるをいふ

一花の本木を心しんといふ事は人も万能まんのうありといへども心定まらずば比興ひきよう也其いはれに花も本木つよくなきはわろきなりさ

て本木をしんといふは此こゝろなり

一 公方様御成の時押板に三幅対三具足香炉匙火箸の台香合を卓しよくの上に置也是を三ツかざりといふ置べき様は中に香炉さきにきやうしばしの台まへに香合右に燭台左に花瓶此時の花は燭台の鶴に対する也右長左短の花可然候脇花瓶は絵の前にわき卓を置て其上にをく也左の絵の前の花は右の脇花瓶の花をうけて右長左短と可立也又右の絵の前の花は左の脇花瓶の花をうけて左長右短と可立也脇花瓶の花は心当季の花可然候

一 五幅一對をかくるには口伝大事ありて秘云々本尊の前の卓も五かざりと云事有是鶴台二又花瓶二中の三は同前鶴は内にあり花瓶は外にあり此内といふに二説あり口伝也鶴によくむかひあらずばかざるべからず

一 脇絵定四季の絵あるべし然らば春夏秋冬と東よりはじめ可掛なり

一 たなの上には卓を置ざる事也「卓もほり物はくるしからず」

一 盆に花瓶をすへべしおし板には花梨の卓をすへべし「くはりんにかぎるべからずしたんつぶさんさうげなどあるべし」

一 茶碗の花瓶をちやはんの台にをくべからず盆と卓又翰盤などにをくべし

一 香炉のはいは五にも六にも分ておすべし足をば面にむくべし順に出すに口伝あり

一 方盆には右に香匙火箸台中に香合左に香炉ををく也

一 右の鉢はたなにては下にて置押板にては右の山の尾によりて花に對してをく也又一物にも押板の中に置也

一 違棚には聞香炉を置が本也其外の物はしかるべきやうに見はからひてをくべし食籠一酒の入物一盃一茶碗の物あらば其類の物一薬籠箱一くしづ、一壺一如此物の類皆々取合て可然様候色を青黄赤白黒とて置也

一 ちがひだなの立花はたなのちがひのごとくに可立也細口鬺筒の風情ならば中の棚に可然候又双花瓶等は下の重に立べき也

一 柱花瓶の花は下の花に同前さりながら少しなげひらきたるがおもしろく候

一 御祝ひ祝言の花には深山しきみ枯枝など可禁候草の心の花には木の枝をそへべからず野の躰にて候間祝言にはづれ候

一 花瓶の花に花瓶のはたより下へなげたる物はこのむべからず禁忌にてはなく候へどもわろく候

一 三具足の香合は口二寸あまりに候が能候

一 風動のいとをはる事は押板の角柱の四分半の面につぼを打べし絵の中へりのとをり琴の糸也

一 押板の高さは敷居より八寸但一間半ならば七寸五分也ひろさ壺尺七寸也

一 柱飾の釘はなげしより五寸下也大客殿にはうつ事なかれ書院又は小座敷の物也

一 風鈴は唐には椽のたる木にかくる也日本には広椽の天井にもかけ候又客殿の中央の卓の上にも掛候又は押板の前のなげしにもかけ候

一 火どほしをば押板の前又半間押板の前仏前などに掛候

一 喚鐘は書院の天井の中程につるべき也

一 茶の湯は公方様の御成の間に御目のかよふちかくに仕候が本也御出までは水引にて納を付るが本なり

一 たなに盆を置時は建蓋を台にすへてさきにをく前には右に茶筌左に壺中に茶酌を置也

一 うがひ茶碗を台にすへてたなのをき物にする事あり又建蓋を一盆に入て台ともに一物にをく事も候

一 草の心に木をそふる事古今の歌に

夏山の草葉のたけぞしられける

春見しこ松人しひかずば

此歌の心を見る時は其心によくにせくとそへすまし上候可然候

一 花の枝をすかす事に忌事おほく候ぬきとをしの枝とて同とをりにある枝をいむべき也是は人のきる物をひろぐに似て
わろく候むねをさす枝とて面へさす枝是又主人をさす間忌也草も正面へはなびかせぬ事也又同草を両方へ同とをりに
なびかする事もわろく候又十文字の枝とて忌べしこれは本木のもとによこへ枝のさしたる時其とをりにそへ草をすぐ
に前にさせば十文字に見ゆる事わろく候

一 かさね枝と云は本木の枝にそへなげたる枝の有時其下草になげたる草木を立候を云これを可忌也

一 右長左短の花には右への副草をなげさせば左のそへ草座敷をいだく心思程面白候

一 左長右短の花に左へそへ草開てなげば右へそへ草いなくべし然は心のうしろへそへ草立たるがおもしろく候

一 花瓶の口ひらくときはそへ草花瓶のかたよりのびてひらくが面白候又花瓶の口すぐなる時はくちのきはにてひらくべく候

一 一本木のなげたる事あらばふとく立たる心をひかへさせて立べき也なげ返したる木を立べきなりなげたる花はなげやうに親木を二木立てそへ草を仕るが本なり

一 祝言の花にうちきり松とて松ばかり立る事有これは壺本たちたるに枝の五方へさしたるを以てかたまたを西へなして立べきなり

一 当壁枝あてかべえだと申はかべにさゝへたるをいむべき也

一 双花瓶に心一だけ半にしてひきくみゆるときは馬蘭ばらんすゝき等の物を以の外に高く可立也

一 心しんはすこし前へうつぶく心よきなり

一 二心しんといふは花瓶のどうふとくして菊かきつばた仙翁華などのやうなる物一もと立候得ばよはく候時二本ならべて立候也これをいふなり花瓶にはあるべからず

一 なげ入花と云事は舟の花の事也

一 花をいるゝと云事はさいろうのやうなる物に花をいけ候をいふ野山にある躰に可入なり

一 双花瓶に木を立る事庭に木をうゆるこゝろに先づ心を可立候其後可然やうにそへ草あるべし

一 双花瓶に草花を立る事は沢に草の生ふるを見るごとくに立べし

一 花瓶は本尊の面の向きへつれてなびけて可立也

一 副草は本木のもとわろき時其もとをかくすやうにそふべきなり又その副草のもとわろく候はゞそれに副草を可副也

一 草も木もひきくある物はひきく高くある物はたかき心をもて立べき也是に口伝おほく候能々このみならふべし

一 よめをむかへ候には花を立候はぬ事也是は花はちるによつて也久しく男にそゆる心に立候が本也

一 毎事祝事には松を立るが本也物の色を四色に立候はぬ事花四瓶立候はぬ事也

一 心に風の枝ある時は副草にも風のこゝろあるべし掛絵に風あらば其風のやうにふかすべき事不然候書院又は窓などのあるかたより風の入たるやうに可立也

一 当季の花を捨て別の心を立る事いかゞなる事にて候只其時の季の花を本に仕候てそゆるはなにてそだつるが本にて候たとへば申樂のしてを笛をふき謳をうたひつゝみをはやしたてゝ其してをおもしろくみするやうに可立が本也

一 心つよき時はそへ草までつよく心やさしくば副草までやさしく立べき也

一 心をば物たらずにすかすが本也そへ草そへよく候也歌の上の句に鶯の声なかりせば雪きえぬと云やうに本木をすかし
て下の句に山ざといかで春をしらましとつく心にそへ草をそふる也

一つよき本木ある時は古歌に

ものゝふのやなみつくらふこての上に

あられたばしるなすのしのはら

といふこゝろにたつべきが本なりたゞ花瓶をよく見て此花瓶にはいかやうに可立やらんとあんどよくよくたくみすまして可立なりこのいはれを能々見て初心を忘れずあたらしきこゝろをもたず人の面のごとく十瓶百瓶あらば百瓶かはりてしかとあるべき所に目のありあるべき所に鼻のありあるべき所に口のあるやうにしてさすがにおもしろくしばらく敷あるはあたら敷見えておもしろく候物の下手ははじめてあるすがたをおもしろく思ひ候によつて目のある所に口をつけはなのある所に目を付るこゝろによつてかさねて見久しく見候へばみざめ仕候也こゝろを初心にもつて花瓶毎につゝしみて可立なり花のえださだまらず草の枝さだまらずといへどもならずして立事あるべからずならはざらんに伝ん哉千金莫伝地の上には直く岩の上には曲れり慈悲のえだ智恵の枝可有口伝あり心を身と云をもつて両枝あるべし左の枝に智恵の枝有時は右の開枝は慈悲の枝あるべし又右の枝に智恵ある時は左の枝に慈悲あるべきなり開枝は可為慈又かゝゆる枝は可為智是枝の可為心得也穴堅々々

相阿弥花押○

此奥中華画家姓名有三百余人一畧之